〈論　説〉

エコノミクス
第3巻第2号
1998年11月

大土地所有制の内部構造

ラテンアメリカの事例研究

関根　順一

1．本稿の目的

大土地所有制はどのような内部構造を持つのか，さらに，その内部構造はどのような自然的社会的条件に支えられているのか。本稿は，もっぱらラテンアメリカの事例研究に依拠しつつ，これらの問題を理論的に解明する。

われわれが主に取り扱うのは，大土地所有制が徐々に姿を現し始める16世紀後半から農地改革が実施されるまでの長い期間である。この時期，メキシコ，ペルー，チリを中心とするスペイン語圏では，アシエンダ（hacienda）と呼ばれる大土地所有制が成立する。本稿が主な考察対象とするのは，このアシエンダである。もっとも，この地域では，狭い意味のアシエンダ[1)]だけでなく，外国市場向けに商品作物を生産するプランテーション（plantation）や牧畜業を中心とするエスタンシア（estancia）など種々の大規模農業経営が発達した。また同じアシエンダにしても，その規模は数人の農民を使う程度のものから1つの地方全域を覆うものまでさまざまであり[2)]，その所有者には世俗の地主に限らず，教会や修道会さえも含まれていた[3)]。本稿は，作物の種類についても生産規模に関しても所有者の社会的身分についても多様な大規模農業経営をすべて一括して大土地所有制と呼び，その内部構造の分析を試みる。上述のような大規模農業経営の分類は，多くの場合単に慣習的な呼称

に従っているだけであり，理論的分析の確かな出発点とは思われない。本稿ではやむをえず，主としてアシエンダを念頭に置きつつ，それに近い農業経営をすべて含む若干あいまいな意味で大土地所有制という語を使うことにする。

大土地所有制下では必ず農産物が生産されているが，大土地所有制を単純な農業経営と考えるのは正しくない。実際の大土地所有制は，農業と牧畜業を中核としつつ，食品加工や織物生産を含む一種の複合経営だからである。たとえば，H. Cortes によって創設された所領は，サトウキビの栽培と精製を行う砂糖プランテーション，銀鉱山，さらにこれらの生産施設に必要な家畜を供給する牧場から構成されていた[4]。メキシコ北部でも銀鉱山の経営者が，鉱山内の運搬や採石に使われる牛馬を育て，鉱山奴隷や監督者の食糧を確保するために農牧業を営むことはめずらしくなかった[5]。オブラへ (obraje) と呼ばれる都市の織物工場でさえ多くの場合，その経営は農場主や牧場主の手に握られ，大土地所有制の一構成要素をなしていたのである[6]。このように大土地所有制の経営単位とは砂糖プランテーション，鉱山，農場，牧場などの各生産施設ではなく，統一的な経営方針のもとに置かれるこれらの生産施設全体と考えるべきであろう。

大土地所有制の全盛期を16世紀後半から農地改革の実施までとすることにはほぼ異論はないにしても，事実上その存続期間を全盛期の前後どこまで延長できるかについては意見が分かれる。原住民の労働力を使用し，彼らから貢租を徴収する権利であり，土地に対する法的規定を持たないエンコミエンダ制 (encomienda) を，法的土地所有制度であるアシエンダに先行する大土地所有制の一形態と見なしてよいかどうかはラテンアメリカ経済史の専門家の間で論争があるし[7]，1920年代以後メキシコで，1952年以後ボリビアで，1968年以後ペルーで実施された農地改革がどれほど土地の再分配に貢献し，どれほど大土地所有制の解体を早めたかについても研究者の間で評価が分かれる[8]。大土地所有制の成立と崩壊に関するこれらの未解決論争に足を踏み入れないために，本稿は，取り扱う時代をやや厳しく限定し，大土地所有制が疑う余地なく確立している時期だけを研究対象とした。

本稿の目的は，何か新しい歴史的事実を提示することではない。そうではなくて，すでによく知られた諸事実の間にどのような一般的諸関係が成立し

ているかを示すことが本稿の目的である。大土地所有制の内部でどのような経済活動が行われているのか，より具体的には大土地所有制の経営単位はどのような経済主体から構成され，これらの主体間で財はどのように生産され，分配され，消費されるのか。多くの文献は，この点について断片的な記述を残すのみである。われわれはまず，これらの断片的な知識を総合し，大土地所有制内部の経済活動全体を統一的な経済システムとして再構成した。その上で，この経済システムを成立させている自然的社会的諸要因を探った。

われわれが解明しようとしたのは，大土地所有制という統一的な経済システムが，同時期に観察される他の自然的社会的諸条件とどう結びついていたかであり，けっして，それらの諸条件の形成や消失の過程ではなかった。それゆえ，本稿は，すでに確立した大土地所有制の研究であり，大土地所有制の形成過程あるいは崩壊過程の分析は本稿の考察対象外である。

ラテンアメリカで大土地所有制が力を持っていた16世紀後半から20世紀初頭にかけての時期，西ヨーロッパでは機械制大工業に立脚する近代部門が形作られ，急速に成長していた。そのため，ラテンアメリカの大土地所有制は，スペイン本国の重商主義政策[9]，外国資本の流入[10]，西ヨーロッパにおける一次産品市場の拡大[11]を通じて，姿を現しつつあった西ヨーロッパの近代部門から強い影響を受けた。このような近代部門からの影響は，基本的に前近代部門の生産組織の１つと考えられる大土地所有制の固有な経済活動をゆがめる方向に働くと思われる。本稿はこのような外的な影響をできるだけ捨象するよう努めた。というのは，われわれは，ラテンアメリカ経済の純然たる地域研究ではなく，あくまでラテンアメリカの大土地所有制をその重要な事例の１つとする前近代部門の生産組織一般の理論研究をめざしているからである。

実際の研究は，歴史的事実の集積の中から大土地所有制を経済システムとして再構成し，ついでその成立要因を探るという方向で進められた。しかし，研究成果をより簡明な形で提示するには，その方向を逆転したほうがよいだろう。すなわち，最も基礎的な要因から出発して論理的な展開の結果，大土地所有制の経済システムがどのように構成されるのかを示すことが望ましい。本稿もこの方針に従って，第２節では大土地所有制下の生産技術を特徴づけ，続く第３，４節では大土地所有制の構成要素を，第５節では構成要素間の諸関

係を明らかにする。

2．生産技術の特徴

われわれが関心を持っている全期間を通じてラテンアメリカ全域に及ぶ労働生産性の正確な水準を知ることはきわめて困難である。せいぜいわれわれにできることは，近似的な統計と個別の歴史事実から，少数の国々について労働生産性のおよその水準を推察できるだけである。

第2－1表は，1900年から近年までのラテンアメリカ地域主要4カ国における1人あたり国内総生産（GDP）の推移を示している。もちろん，全人口に占める労働力人口の比率や失業率は一定でないから，1人あたり国内総生産の時系列データからただちに労働生産性の動向を正確に知ることはできない。しかも，第2－1表は，本稿が研究しようとする時期のうち，ごく短い期間を取り扱っているにすぎない。しかし，もし労働力人口の比率や失業率に大きな変動がなければ，1人あたり国内総生産の推移は，近似的に労働生産性の動向と一致すると考えられる。その限りで，第2－1表から推測できることは次の2点である。第1に，第2－1表の全期間を通じてラテンアメリカ地域主要4カ国の労働生産性は上昇傾向にあること，第2に，これら4カ国の労働

第2—1表　ラテンアメリカ主要国の1人当たりGDP（1900—1989）

1985年アメリカドル表示

	1900年	1913年	1950年	1973年	1989年
アルゼンチン	1,724	2,377	3,121	4,987	3,880
ブラジル	586	700	1,441	3,363	4,241
チリ	1,284	1,685	3,156	4,444	5,355
メキシコ	872	1,104	1,570	3,155	3,521
平均	1,117	1,467	2,322	3,987	4,249
先進16カ国平均	2,374	2,937	4,693	10,396	14,456

出所：Maddison［1991］, pp. 24—25より作成

注：先進16カ国は，オーストラリア・オーストリア・ベルギー・カナダ・デンマーク・フィンランド・フランス・ドイツ・イタリア・日本・オランダ・ノルウェー・スウェーデン・スイス・イギリス・アメリカをさす。

生産性は，同時期の先進国の労働生産性と比べて低い水準にあることである。もし，労働生産性の上昇傾向が1900年以前も変わらなかったとすれば，植民地期から19世紀末までの全期間，ラテンアメリカ地域4カ国の労働生産性は，1900年時点の水準より低く，それゆえ，近代経済成長の過程にある1900年以後の先進国の労働生産性を相当程度下回ることになろう。

労働生産性の上昇については，個々の農業経営の記録からも確認することができる。たとえば，メキシコ中部の糖業アシエンダでは，16世紀末から19世紀初めまでの200年間，1人当たり砂糖生産量，単位面積当たりサトウキビ収穫量はほぼ一貫して増加を続けてきた[12]。また，労働生産性の水準についても，主要な産業部門である農業で，特に伝統的アシエンダで労働生産性が著しく低いことが知られている。実際，伝統的アシエンダでは技術水準が低いために機械化の進行は緩やかであり，生産の拡大は主として労働投入の増大に依存していた[13]。

社会全体で労働生産性が低いとき，全産業部門に占める農業生産の比重は高まる。1人の人間が1時間の労働を続けるとき，主として食糧から構成される生活物資の一定量が必要であると仮定しよう。労働生産性が十分低ければ，1時間の労働から得られる財の量はその分少なく，人間の生存を前提する限り，その中での生活必需品の割合は増加する。言い換えれば，1時間の労働の中で生活必需品の生産に費やされる時間が増大する。その一方で生活必需品以外の財，奢侈品はもちろん加工原材料や生産用具の生産に割くことのできる労働時間は低下する。すなわち，社会全体の労働生産性が低いとき，この社会では生活必需品生産の比重が高まる一方，加工原材料や生産用具の生産の比重は相対的に低く抑えられる。牧畜業を含む農業生産は，その生産過程の中でわずかな生産用具だけを利用しつつ[14]，土地等の本源的生産要素に働きかけ，生活必需品目中の不可欠な項目である食糧を生産する[15]。このような特徴を持つ広い意味での農業は，こうして，労働生産性が全体として低い水準にとどまる社会における典型的な産業分野となる[16]。別な言い方をすれば，ある社会における農業生産の優位は，その社会全体で労働生産性が相当程度低いことの表れである[17]。

すでに述べたように，ラテンアメリカ地域主要4カ国について労働生産性

第2—2表 ラテンアメリカ主要国の農業労働力（1930—1980）

労働力人口に占める農業従事者の割合(%)

	1930年頃	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年
アルゼンチン	24.0	24.5	25.1	20.6	16.0	13.0
ブラジル	68.7	67.4	59.8	52.0	44.9	31.1
チリ	37.5	35.6	34.2	30.0	23.2	16.4
メキシコ	67.3	64.9	60.4	55.1	44.1	36.6

出所：Long and Roberts [1994], p. 329より作成

は1900年以来，上昇を続けている。一方，第2-2表に示すように，これらの国々に関して労働力人口に対する農業労働者の比率はこの間全体として下がり続けている。こうして労働生産性の上昇傾向と農業生産の比重の低下傾向を見比べれば，ラテンアメリカの主要国に関してわれわれの仮説が誤りでないことが確かめられるだろう。とはいえ，この点を不十分ながらも確認できるのも，われわれが対象としている期間全体から見ればまことに短い期間に関してのみである。

1492年以後の征服の過程でスペイン人はヨーロッパ産の多くの作物を新大陸に持ち込んだ[18]。その結果，ラテンアメリカの多くの地域では，植民地期以来，トウモロコシ・豆・とうがらし・カボチャ・タバコ・ココア・インディゴ，さらにジャガイモやキャッサバのような塊茎類など新大陸固有な種と並んで，小麦・大麦などの穀物をはじめ，ヨーロッパ産の野菜や果物が栽培された[19]。加えて，スペイン人は牛・豚・羊・馬・山羊・らば・ろばなどの家畜を旧大陸から持ち込み，それまで家畜の飼育がほとんど皆無だったラテンアメリカ各地に牧畜業が急速に広まった[20]。

工業部門の比重が低ければ，農業部門における工業製品の利用もより限定的である。実際，工業製品は，一部に灌漑設備が築かれた[21]ことを除けば，鉄製のローマ犁をはじめとする各種の犁，鍬（くわ）や鋤（すき）・山刀・軛（くびき）など簡単な農具が作られた[22]にすぎない。犁は牛やらばに牽引され，土地の耕作に使われた[23]。社会全体の労働生産性が低水準にとどまるとき，簡単な農具とそれに動力を提供する役畜が農業生産技術の基軸となった。

一方，工業部門は農具類の製造，製糖やワイン醸造などの食品加工[24]，毛織

物や綿織物の紡織と染色[25]を担った。これらの工業生産は，その工程の大部分を人々の経験と熟練に依存する手工業生産である。生産技術が人々の経験や熟練に大きく依存していることは，生産技術の習得に多くの時間が費やされることを意味し，技術の習得期間をも含めたより広い意味での労働生産性が低いことを示している。大土地所有制が力を持っていた時期，ラテンアメリカ諸国では相対的に低い労働生産性を反映しつつ，経済活動の中心はまちがいなく農業生産であり，工業生産は副次的な位置に甘んじていたにすぎない。人々は，そのような技術的基盤の上に彼らの間の社会的関係，一定の生産組織を形作ることになる。

3．自給自足の成立条件

農業生産が社会的生産の中心であるような社会において財の生産・分配・消費はどのような特徴を持つだろうか。

前節で述べたように，社会全体で労働生産性が十分低くければ，人々は社会的総労働時間の大部分を農業生産に費やすことになる。このとき社会の全構成員は，各々わずかな副業を営みながらも，農業生産に従事しているかもしれない。あるいは，主として農業生産に専念する大多数の人々と，農業労働から解放されて専門的な職業を持つ少数の人々とに分かれているかもしれない。だが，いずれにせよ，社会の大多数の人々にとって農耕が各人の主要な生産活動であることに変わりはない。

農産物は直接各人が消費可能な財であり，しかも各人の生存のために必要不可欠な財である。そのため，農産物の生産者は彼の生活に不可欠な財を，他の生産者との交換を経ることなしに直接手に入れることができる。言い換えれば，農産物の生産者は十分な産出量が確保されている限り，一般に交換を通じて生活必需品を手に入れる必要性を持たない。また，周囲の自然環境に相当程度依存する農業生産[26]において，その生産物の種類は，自然的諸条件がほぼ等しい近隣地域でほとんど変わらない。十分狭い範囲では，ほぼ同種類の作物が生産される。したがって，各生産者が，自らが栽培したのと異なった農産物を近隣の同業者から手に入れる可能性は非常に低く，農業生産者

にとって近隣の同業者との農産物の交換から期待できるものはそう大きくはないだろう。交換はせいぜい，生産された各種の作物の内訳を変更するものでしかない。このように，労働生産性が社会全体で十分低いとき，生産物の交換を促す誘因は，農産物が正常に生産されている限りで，主として農業生産に従事する大多数の人々の間で，必要性の点でも欲求充足の点でも非常に限られている。

各人の生活必需品の生産に加えて，その生活必需品の生産に必要な生産用具や原材料も自ら作り出すことができれば，各人の生活は他の経済主体との交換を媒介することなしに可能となる。このとき，財の生産者は直接に自らが生産した財の消費者であり，各人の経済活動は高度な自給自足性を獲得する。当然，各人が高い自給自足性を保持している経済では，各経済主体の間での財の交換は積極的な誘因を持たない。

さて，われわれが研究している植民地期以来のラテンアメリカにおいても各農業経営はこのような高い自給自足性を備えているだろうか。農業生産の比重が高いことから，前述の通り農業生産物に関しては各農業経営の自給自足性が高いことが予想できるが，はたして生産用具の生産についても同様に高い自給自足性を認めることができるだろうか。

4．ラテンアメリカの農民経営

村落内で生活する農民やアシエンダ領地内に居住する小作農などの農民小経営はいずれも，状況に応じてその程度は異なるにせよ，穀物をはじめとする食糧のかなりの部分を自ら供給することができた。村落の土地は，第1に住民の居住区・菜園などからなる村落の中心部，第2に共有地，第3に家畜を放牧し，野生の果物や木の実を採集する森林・草原・丘陵の斜面，最後に家族ごとに保有地として割り当てられた耕地から構成される[27]。そのうち村落内の各農民家族はトウモロコシ・小麦・大麦を栽培するために耕地はもちろん，羊やラマ・アルパカを飼育するために共有地を自由に利用することができた[28]。また，アシエンダ領地内の小作農は，住居とそれに隣接する菜園，輪作が可能な耕地，森林の用益権を保有し[29]，トウモロコシ・豆・ジャガイモ

などの主要作物を育て，2，3羽の鶏や，運が良ければ豚を飼うこともできた[30]。小作人は，その身分がアフリカ系の奴隷であろうと，インディオの常傭労働者であろうと，メキシコ中部の糖業アシエンダにおいても[31]，ペルー沿岸部の砂糖プランテーションにおいても[32]，アンデス高地のアシエンダにおいても[33]，ベネズエラのココアプランテーションにおいても[34]，食糧など生活物資を自給できる土地を保有しており，生活必需品の自給自足性の高さは，大土地所有制下の小作農の共通な特徴であった。

農民経営の自給自足性がいかに高かったかは，20世紀中葉においてメキシコ全体でなお，主食であるトウモロコシ収穫量の50%以上が自家消費されていた事実からも推測できる[35]。なるほど自家消費分を超える作物や家畜が市場で販売され，農民経営によって市場に供給された商品量は全体として領主経営に匹敵するほどであったが，個々の経営ごとに見れば，大多数の農民は，少額の収入を求めてまれに市場を訪れ，総生産物中のごくわずかな部分を販売していたにすぎなかった[36]。総じて，村落レベルでは全体として財の取引総量は相当量にのぼったにせよ，個々の商品の取引数量は少なく，商品交換の手段も不足していた。多くの商品は，物々交換によってあるいはカカオの実，黒砂糖やコカの葉などの代用貨幣を媒介に取り引きされた[37]。

穀物をはじめとする食糧の生産に関して自給自足性が高いことは確認できたが，その原料や生産用具あるいは工業製品に関しても農民経営は同様に高い自給自足性を誇ることができるだろうか。なるほど畑に播く種子も草原や荒れ地で飼育される家畜も農民経営自身の生産物だから，農民経営は農業や牧畜業の「原料」を自給することができる。また，一部の農民が若干の手織りの毛織物や綿織物・アルコール飲料をはじめとする手工業製品の生産にかかわっていた[38]のも事実である。たとえば，20世紀初めにおいてさえボリビアの農村では多数の女性が紡ぎ手として働き，牧畜経済を補完していたことが報告されている[39]。しかしながら，農民経営は，生産活動に必要な生産手段や生活に必要な手工業製品のすべてを自給できたわけではなかった。

植民地期以来ラテンアメリカの諸都市では，大工・銀細工師・車大工・樽製造人などの手工業者が活躍し，一部には中世ヨーロッパに見るように明文化された規約を持つギルドも出現した[40]。また，多くの都市で工場制手工業が

成立し，毛織物や綿織物の生産が始まった[41]。手工業では生産技術は主として，徒弟制度に象徴される長期の訓練と熟練を経てそれぞれの手工業者の腕に具現化される[42]。長期の職業訓練を受ける余裕のない大多数の農民は熟練を要する技術を身につけることができず，若干の手工業製品の生産を専門の手工業者の手に委ねざるをえなくなる。同様に，砂糖の精製など当時としては比較的高い生産設備の集積を必要とした食品加工[43]も農民の手を離れた。こうして，手工業製品に関する自給自足性は，農産物に比べて低い水準にとどまる。

各農民経営は食糧とその原料の大部分を自給できるが，必要な手工業製品の少なくとも一部は自ら生産することはできない。このとき，各農民経営は，必要最小限を超えて生産することのできる生活物資と引き換えに，専門的手工業者から必要な工業製品を手に入れようとするだろう。

5．領主経営

アシエンダの経済活動は常に農業生産を含んでいたが，必ずしも農業生産に限定されていたわけでなかった。非常に多くの場合，農耕と並行して牧畜が，織物生産が，またあるときは貴金属の採掘や精錬がアシエンダの経済活動の重要な構成要素を形作っていた[44]。また農業生産が中心である場合でも，中規模以上の多くのアシエンダは，肉類，乳製品，毛皮，樹脂などを生産し，農作業や運搬に使われる家畜を飼育するとともに，木工所や鍛冶工房を領地内に建て，農具類や荷車を製造修理することができた。さらにいくつかのアシエンダは，水車や葡萄の搾り器からなめし皮や石鹸の工場（こうば）や織物工場・製粉所[45]，サトウキビが栽培されている地域では灌漑施設や製糖工場まで備えていた[46]。このように，ラテンアメリカの大土地所有制は，単純な農業経営あるいは牧畜経営というよりはむしろ農業生産を中心とする自己充足性の高い複合経営体とみなすことが妥当である。

アシエンダ内の工業生産に従事していたのは，大工・鍛冶屋・ワイン醸造業者など所領内に住む多少とも専門的な手工業者であった[47]。たとえば，ある糖業アシエンダでは，大工・鍛冶屋・車大工などの専門職がアシエンダ内

の装備や施設の組立や修理を担当し，陶工が製糖工場で使われる粘土の型を作っていた[48]。

アシエンダ内の専門的な手工業者は，労働時間の大半を熟練を要する手工業生産に費やすため，生活に必要な食糧を生産するのに十分な時間的余裕を持たない。逆に言えば，社会の大部分の人々に課せられた農業労働を多少とも免除されているがゆえに，一部の人々は専門的な手工業者たりうるのである。専門的な手工業者が，農民大衆と異なって，食糧を十分に自給できないとすれば，誰がどのようにして専門的な手工業者に穀物類をはじめ食料品を提供するのだろうか。

専門的な手工業者の食糧問題をアシエンダ所有者はさしあたり領主経営内部で解決しようとするだろう。通常，所領の一画はアシエンダ所有者の直接経営下に置かれている。アシエンダ所有者は，アシエンダ所有者自身あるいは彼の家族を頂点とし，比較的高い教育を受けた経営担当者，より限定された範囲で農民を指揮する現場監督者，現場監督者のもとで働く最底辺の常傭または臨時雇用の農民からなる階層的な経営組織を編成し[49]，所領内の領主直営地(demesne)の耕作に当たった。こうして領主直営地で生産された農産物によって，アシエンダ所有者と彼の家族，彼と生活をともにする彼の親族・友人・取り巻き[50]に加えて現場監督者と手工業者からなる所領内の専門的職業従事者の消費需要は部分的にせよ満たされた。実際，監督的地位にあるかあるいは熟練を要する仕事に就いているアシエンダ内の専門職は，羊肉・牛肉・トウモロコシ・小麦・衣服・ワイン・魚などの配給を受けていた[51]。

しかしながら，広大な耕地や牧草地・森林などを備えていたにもかかわらず，領主直営地は厳密な意味で所領内の現場監督者や手工業者の食糧供給を完全に賄うことはできなかった。というのは，広い領主直営地を耕作し，作物を収穫するには黒人奴隷，自由なインディオ居住者からなる領主経営内の農業労働力だけでは不十分だったからである。また，ときとして必要な農業労働力が得られ，領主直営地内の諸資源が十分活用されたときでさえ食糧供給は不足気味であった。

6．領主経営と農民経営の関係

農民経営が，生産活動に必要な生産用具と消費生活に必要な生活物資のすべてを自分の力で作り出すことができ，また領主経営が必要な食糧を生産するのに十分な労働力を自分の経営内に保持することができれば，農民経営と領主経営はともにほぼ完全に近い自給自足性を備え，両者の間に何らかの経済的関係が結ばれる必然性は皆無となろう。ところが，農民経営には熟練を要する手工業製品の製作に携わる能力はなく，領主経営には必要な食糧を自給するのに十分な労働人員の余裕はない。そこで領主経営と農民経営はそれぞれ，自分自身の必要性を超えて生み出すことのできる「財」と引き換えに不足する「財」を手に入れようとする。農民経営は，主として農業生産に適した未熟練の労働力と引き換えに，手工業製品を得ようとするだろうし，領主経営は，その経営組織に属する専門的手工業者が製作した手工業製品と引き換えに，不足する農業労働力を得ようとするだろう。その結果，領主経営と農民経営の間には，見かけ上農業労働力と手工業製品の交換が成立する[52]。こうして近代社会の代表的経済主体と比べればはるかに高い自給自足性を備えた2つの経営組織の間に，偶発的ではない経済関係が取り結ばれる。

領主直営地近くの村落に住み，初期にはレパルティミエント制(repartimiento）と呼ばれる労働徴用制度を通じて，のちに村落の首長やアシエンダの現場監督者を通じて労働力を提供するインディオの農民[53]，所領の中心部に位置する集落に住む黒人やメスティソ・インディオの身分上自由な農民または奴隷[54]，あるいは所領の周辺に「不法占拠」を黙認される等の形で居住を許された独立農民[55]，人種・身分・居住形態などの点で多様なこれらの農民すべてが領主経営に対して未熟練労働力を供給する。農民たちは領主直営地における労働形態によっても区別される。よく知られているように，播種・除草・収穫あるいは家畜の屠殺・羊毛の刈り込みなどで忙しい農繁期と柵の補修や溝の清掃など手のかからない仕事だけで比較的暇な農閑期との交替は大土地所有制下の農業生産の重要な特徴である[56]。この農作業の繁閑のリズムに合わせて，領主直営地で働く農民も2つのグループに分かれる。年間を通じて領主直営地に労働力を提供する常傭の農民と農繁期に限って労働力を提供す

る臨時雇用の農民である[57]。農繁期には，常傭の農民の家族や近隣の村落，アシエンダ領地内の不法占拠者のもとから労働人員が駆り集められ[58]，常傭の農民とともに現場監督者の指揮下で農作業に加わった[59]。

常傭であれ臨時雇用であれ，大土地所有制下の農民は各農民経営での労働時間を削り，その分を領主直営地での労働に振り替える。このとき，各農民経営で収穫される農産物は，削り取られた労働時間分だけ減少し，領主直営地の農産物は同じ分だけ増加する。農産物は，労働時間の振り替えという間接的な形をとって農民経営から領主経営に引き渡される。もっとも，農産物の引き渡しはこのような間接的な形にとどまらない。各農民保有地で収穫された農産物の一定量または一定割合が直接，領主経営に引き渡されることもある[60]。さらに，時代が下がるにつれて，場所によっては貨幣支払がこの農産物の現物提供にとって代わることもある[61]。ともあれ，労働時間の移転という間接的な形をとるにせよ，農産物の移転という直接的な形をとるにせよ，本質的に重要なことは，結局，食糧を中心とする生活物資の剰余部分が農民経営から領主経営に供給されたという事実である。

一方，領主経営から農民経営への財の移転に関してまず注目されるのは，いわゆる債務奴隷制（debt peonage）である。メキシコをはじめラテンアメリカ諸地域に普及したこの制度のもとで農民は，領主直営地での労働に先だって貨幣や衣類・蒸留酒・小麦粉・砂糖などの前貸しを受け[62]，その少なくとも一部をトウモロコシやサトウキビの収穫時における労働によって返済した[63]。債務奴隷制はアシエンダ領地内に設けられた売店（hacienda store）と密接に結びついていた。アシエンダ内の売店では，アシエンダ所有者が商人から購入した輸入品の衣類・布地・糸や染料あるいは刃物や靴，さらに帽子や靴下，アシエンダ所領内で作られた糖蜜や蒸留酒が販売された。農民にとっては売店で何かを買うと，将来労働によって支払うべき債務がそれだけ増える結果になった[64]。債務奴隷制が農民を土地につなぎ止める有効な手段として機能したかどうかは経済史家の間で見解のわかれる点であるが[65]，何よりも確かなことは，これらの制度を通じて領主経営から農民経営に財が移転したという事実，とりわけ農民経営自身が自給できない手工業製品がこうして農民経営に手渡されたという事実である。おそらく債務奴隷制やアシエン

ダ売店以外の経路も含めれば，領主経営から農民経営への手工業製品の移転は，農民への給付の相当割合に達したにちがいない。事実，イエズス会所属のあるアシエンダでは，非奴隷労働力への給付の大部分は衣類であった[66]。

農民経営は，主として農業労働力の提供という形で農業生産物を領主経営に供給し，領主経営は，農民経営が自給できない手工業製品を農民経営に供給する。それぞれの生産物の相互供給の結果，農産物と手工業製品が交換される。特別な技能を必要としない農業生産を中心とする農民経営と熟練を要する手工業生産を抱える領主経営との間で社会的な農工分業が成立するとき，それぞれの経営内で充足されない財は，相手方の経営との交換を通じて獲得されなければならない。農産物と手工業製品の交換は，農工分業体制が確立していることの論理的帰結である。

さて，農産物と手工業製品の交換が市場メカニズムによって媒介されないとき，すなわち商品の交換が各商品生産者間の交渉だけに委ねられるのではないとき，両者の交換は媒介者を必要とする。農産物と手工業製品は，一旦この媒介者の手元に集められ，媒介者の手を通じて配分される。この交換の組織者がアシエンダ所有者であり，この組織者による農業生産と手工業生産の結合が大土地所有制である。正確にいえば，アシエンダ所有者が，結果的に農産物と手工業製品の交換を媒介する機能を担うことになるのではなく，逆にこの機能の遂行者としてアシエンダ所有者が定義されるのである。同様に，大土地所有制が結果的に農業生産と手工業生産を結びつけるのではなく，この特定の結びつきを大土地所有制と呼ぶのである。

手工業者の肉体的生存をいかに保障するは，農工分業体制の組織者にとって最も困難な課題の１つだろう。というのは，労働生産性が十分に低い社会では，手工業者を養うに足る食糧を生産するのに相当量の労働を必要とするからである。すでに述べたようにアシエンダ所有者は，経営管理者や現場監督者からなる経営組織を編成し，手工業者に対する食糧調達という課題に取り組むだろう。このとき，厳密にいえば，狭い意味でのアシエンダ所有者だけでなく経営組織の管理層全体が農工分業体制の組織者として機能する。

社会的地位の維持や権勢の誇示など非物質的欲望の充足が，アシエンダ所有者の主観的経営動機になっていたことはしばしば指摘される[67]。とはいえ，

そうした個人的欲望を満たすためにもアシエンダ所有者はなによりまず農工分業体制の組織者としての役割を全うしなければならない。与えられた生産組織の中で一定の機能を果たしているがゆえに，その機能の遂行者は富であれ，名誉であれ，社会的地位であれ，彼の個人的願望を達成することができるのであって，彼の個人的願望から一定の生産組織が形成され，その中での彼の役割が生じるのではない。

農民経営と領主経営の結合体としての大土地所有制は，農業生産と手工業生産を統合し，生活必需品に関しても生産用具に関しても非常に高い自給自足性を獲得することが予想される。なるほど，ラテンアメリカの大土地所有制は所領内での自給自足の達成を経営理念としていた[68]。アシエンダ所有者は，所領内に灌漑地や牧草地・河川・森林など多様な土地と天然資源を確保し，所領内の種々の需要を外部からの購入にできるだけ頼ることなく，所領内で賄うよう努め，その結果，少くとも生活必需品についてはほぼ完全に近い自給体制を作ることに成功したのである[69]。

しかしながら，実際の経営は必ずしも理念通りではなかった。アシエンダ所有者は，種子や農具の購入，柵や穀物倉庫・堰の建設，領地の拡張あるいは宗教上の義務のために貨幣を支払う必要があった[70]。そこでアシエンダ所有者は都市の市場で穀物や食肉などの農産物を販売し，必要な貨幣を手に入れようと試みた[71]。その結果，理論上予測される結論に反して，実際には植民地期から農地改革の実施時期までの期間，大土地所有制の自給自足性は必ずしも高くない。

高い自給自足性を達成できなかったことには2つの理由があると思われる。第1に，この時期のラテンアメリカ経済は，近代社会からの影響をまったく受けない，いわば「純粋」な前近代社会ではなかったからである。そのため，本来，前近代社会の経営単位である大土地所有制も，海外のあるいは国内の近代部門からの影響を免れることはできなかった。すでに指摘したように，多くのプランテーションが先進諸国向けの生産を行うと同時に，先進諸国から機械類や生産設備を輸入している点などその顕著な1例であろう。第2に，前近代社会における都市の経済的機能をどう特徴づけるかという問題にほとんど手がつけられていないからである。

多くのアシエンダ所有者は都市に邸宅を構え，領地の視察を除いて通常1年の大半を都市の邸宅で過ごす[72]。また穀物や食肉などのアシエンダの農産物は都市に運ばれ，アシエンダの代理店を通じて販売された[73]。その結果，たとえばメキシコ中央部の諸都市では17世紀から18世紀にかけて食糧の供給の大部分を周辺部のアシエンダに頼ることになった[74]。大土地所有制が都市と農村を媒介する機能を恒常的に果たしていたとする見解[75]は，以上のような事実に根拠を置いている。この見方をさらに押し進めて，大土地所有制の経営範囲を，アシエンダ所有者の管理下にある都市部の商工業施設にまで拡張することはできないだろうか。もしそれが可能であれば，従来独立な当事者間の商取引と考えられがちであった都市とその近隣農村のアシエンダとの間の農産物と手工業製品の交換過程は，アシエンダ所有者の管理下での財の相互移転とみなされ，都市部の関連施設を含む大土地所有制全体の自給自足性は著しく高まるかもしれない。とはいえ，都市と農村の経済的諸関係や都市の手工業，都市内でのアシエンダ所有者の影響力に関するわれわれの知識は著しく不足しており，現在のところ，この方向での理論展開の準備は十分でない。

7．土地所有概念の有効性

アシエンダ所有者の権威が，領主直営地はもちろん農民保有地・牧草地・荒れ地・森林などからなる広大な土地に及び，しかも，農民保有地から年間を通じてあるいは特定の季節に農民が駆り出され，領主直営地での農耕に従事したという事実は，所有概念を用いて経済現象を解釈することに慣れた人々から見れば，アシエンダ所有者があたかも農民保有地を含むこの広大な土地全体を所有していることの確かな証拠のように映るだろう。所有概念を前提に経済分析を進める立場からは，アシエンダ所有者による直接的あるいは間接的な形での農産物の取得は土地所有の帰結とみなされる。しかし，現代人にとっていかに受け入れやすい見方であるにせよ，またその時代に生きた人々自身が同様の見解をとっていたにせよ，この解釈はアシエンダの経済活動全体を整合的に説明するものではない。第1に，アシエンダ所有者の所

有権は必ずしも農民保有地を含む所領全体には及んでいない。アシエンダ「領地」内の牧草地では土地の境界や水利権，森林では用益権を巡って紛争が絶えず，また「領地」の周辺部には無許可の「不法占拠者」が住みつき，アシエンダ所有者の所有権が及ぶ範囲は確定的ではなかった[76]。第2に，農民保有地から適当な時期に労働力が得られるかどうかはこの土地がアシエンダ所有者の法的所有権のもとに置かれているかどうかとは無関係である。というのは，周辺の「不法占拠者」も農繁期には領主直営地での労働に参加し[77]，所有権が明確に確立していないことはその土地からの季節的な労働力の徴用を妨げるものではなかったからである。

アシエンダと土地所有との結びつきは，特にその形成期には，それほど強固ではない。スペイン人の植民が開始された当時，土地は無償で手に入る財であり，労働力なしには全く無価値であった。アシエンダ所有者の権勢も何よりまず周囲の人々に対する影響力と結びついており，その後，生産用具や家畜など生産手段と結びつけられるようになった。また，アシエンダ所有者は，しばしば公的に認められた範囲をはるかに超えて経済的影響力を行使する一方[78]，アシエンダの土地境界はけっして確定的ではなかった[79]。やがて都市が成長するにつれて土地も高価になったが，それでも土地価格が上昇し続けた18世紀においてさえ，土地所有よりもむしろ家畜・種子・水利権の保有のほうが重要視されたのである[80]。

現実の大土地所有制は，領主経営と農民経営との間の財の交換に基づいている。アシエンダ所有者は，法的所有権が認められたがゆえにこの財の交換を組織できるのではない。そうではなくて，両者の間に一定の経済関係が取り結ばれている限りで，領主経営と農民経営の経済活動の場である土地全体が，アシエンダ所有者などの地主の法的所有下にあるとみなされるのである[81]。

8．要約と展望

大土地所有制はどのような条件のもとで成立するのか。本稿は，ラテンアメリカの事例を参考にしながら，この問題に取り組んできた。得られた結論

を簡単に要約しておこう。

大土地所有制とは，農業生産を中心とする農民経営および専門的手工業生産を含む領主経営からなる農業と手工業の分業体制であった。大土地所有制内の農民経営と領主経営の間では直接あるいは間接に農産物と手工業製品が交換される。さて，この農工分業体制が成立するためには2つの条件が必要である。第1に，農業生産と手工業生産が併存する条件である。社会全体の労働生産性が一定の範囲にあれば，労働時間の相当部分を農業生産に費やしながらも，残りの労働時間を手工業生産に充てる余裕が生じる。第2に，農業と手工業がそれぞれ異なった人々によって担われる条件である。より正確に言えば，手工業製品の製造が，農作業を多少とも免れた専門家に委ねられる条件である。ある種の手工業製品の製造に熟練が不可欠であれば，長期の職業訓練を受ける余裕のない大多数の人々は，手工業製品を自ら作り出すことができず，その自給をあきらめざるをえない。その種の手工業製品が社会全体の生産活動にとって必要であれば，社会は手工業製品の生産を長期にわたる職業訓練を積むことのできる少数の人々に任せるだろう。少数の専門家は農作業を多少とも免除され，手工業生産に専念する。熟練が不可欠であることは，技能への習熟を含む労働時間が長いことを表し，広い意味での手工業生産の労働生産性が低いことを示している。繰り返せば，第1に社会全体の労働生産性が一定の範囲にあること，第2に手工業技術が人々の熟練に強く依存していること，この2点が，農工分業体制としての大土地所有制が成立するための必要条件である。

多くの点で歴史的事実に言及しているとはいえ，本稿の理論は全体としてなお仮説の域を出ない。今後に残された課題の第1は，本稿の理論を歴史データに照らして検証することである。個別具体的な歴史事実に精通しているラテンアメリカ経済史の専門家こそ，このような実証研究に最もふさわしいと思われる。もっぱら分業体制としての側面に焦点を合わせてきた本稿は，大土地所有制のもう一つの側面である農民の共同組織についてほとんど何も語っていない。それは，農民の共同組織が研究に値しないからでは決してなく，ただ十分なデータが今のところそろっていないからである。より豊富なデータに基づいてラテンアメリカにおける農民の共同組織の分析を試みるこ

とは今後の重要な理論的課題である。

直接にはラテンアメリカの事例だけに基づいてわれわれは大土地所有制の内部構造を分析してきた。それでは，本稿の結論はラテンアメリカ地域という狭い範囲に限定されるのだろうか。われわれは，本稿の結論がラテンアメリカであろうと，他の発展途上地域であろうと，あるいは近代以前の西ヨーロッパであろうと，大規模農業経営が成立可能なすべての前近代社会に適用可能であると予想する。本稿が到達した結論の抽象性がきわめて高いことを考慮すれば，この予想は全く根拠のないものではない。しかしながら，この予想の正当性を証明するためには他の発展途上地域や中世期の西ヨーロッパ地域など広範な前近代社会との比較研究が不可欠であるのはいうまでもない。

注

1）たとえば，Wolf and Mintz [1957] は，プランテーションとの対比でアシエンダを比較的狭く限定している。(Wolf and Mintz [1957], p.360.)

2）Van Young [1983], p.15, Bauer [1986], pp.157-158, Mörner [1984], p.193.

3）Mörner [1984], p.194, Chevalier [1963], pp.229-262, Bauer [1983], p.92, p.95.

4）Barrett [1970], p.11, p.70.

5）Chevalier [1963], pp.166-167.

6）Super [1976], p.199, pp.202-203.

7）Mörner [1973], pp.186-188.

8）たとえば，1960年代の農地改革が非生産的な大土地所有制の解体を促し，中規模な自作農の創設に貢献したとする評価（Long and Roberts [1994], p.362.）の一方で，Cardenas 政権下メキシコで進められた農地改革の成果は今日，完全に失われてしまったとする見解もある。(Bagchi [1982], pp.161-164.)

9）Furtado [1970], p.13, Florenscano [1984], p.184.

10）Wolf and Mintz [1957], p.404.

11）Wolf and Mintz [1957], p.398.

12）Barrett [1970], p.101, p.49.

13）Mörner [1973], p.203.

14）実際，生産過程の過半は自然力の作用に委ねられる。

15）もちろん，農産物のすべてが人々の食糧となるわけではない。たとえば，麻や羊毛は織物原料として使われた。

16）ただし，さらに労働生産性が低下し，生産用具の生産に振り向けられる労働時間が一層減少すれば，採集や狩猟が生産活動の中心となるだろう。

17) ただし，国際分業が成立している中で，ある国が政策上の理由から農業生産に特化する道を選んだ場合はこの限りではない。
18) Mörner [1984], pp.204-205, Florenscano [1984], p.153.
19) Mörner [1984], p.204, Florenscano [1984], p.153, p.155. Chevalier [1963], pp. 12-13, p.71.
20) Florenscano [1984], pp.155-157, Mörner [1984], pp.204-205, Chevalier [1963], p.13, pp.84-85, p.92, p.94.
21) Barrett [1970], pp.42-44, Bertrand [1987], pp.148-149.
22) Barrett [1970], pp.44-45, pp.47-48, Bertrand [1987], p.148, Florenscano [1984], pp.153-154, Berthe [1966], p.95.
23) Barrett [1970], p.67-68, p.70.
24) Florenscano [1984], pp.154-155, Mörner [1984], p.206.
25) Chevalier [1963], pp.107-108, Super [1976], p.197, Mörner [1984], p.208.
26) 品種改良や種々の農業設備の導入によって，この自然環境の制約を緩めることはできるが，自然環境の大幅な変更は社会全体での労働生産性の一定の高さを前提とする。
27) Florenscano [1984], pp.160-161.
28) Chevalier [1966], pp.817-818, Florenscano [1984], p.161.
29) Kay [1974], p.93, n.39, Wolf and Mintz [1957], p.389.
30) Macleod [1984], pp.230-231, Berthe [1966], p.101.
31) Barrett [1970], p.46, p.90.
32) Mörner [1984], p.196.
33) Mörner [1984], p.198.
34) Mörner [1984], p.209.
35) Garavaglia and Grosso [1989], p.553.
36) Garavaglia and Grosso [1989], p.566-567, p.573.
37) Macleod [1984],p.250, Bauer [1986], p.163.
38) Macleod [1984], p.240, p.250.
39) Long and Roberts [1994], p.328.
40) Macleod [1984], p.233.
41) Macleod [1984], p.257, Super [1976], p.197.
42) 毛織物工業の例は Super [1976], pp.206-207.
43) Barrett [1970], p.6.
44) Lockhart [1984], p.272, p.274, Chevalier [1963], pp.166-167.
45) Florenscano [1984], p.177, Chevalier [1963], p.75, pp.81-82, Chevalier [1959], p.4, Barrett [1970], p.52.
46) Florenscano [1984], pp.154-155, Berthe [1966], pp.94-95.

47) Florenscano [1984], p.177, Bauer [1983], p.101, Berthe [1966], pp.97-98, p.100.
48) Barrett [1970], p.65, p.77.
49) Lockhart [1984], pp.274-275, Barrett [1970], pp.14-15, pp. 75-76, Bauer [1983], p.101.
50) Lockhart [1969], p.420.
51) Barrett [1970], pp.93-97.
52) 以下で示すように，実はこの交換は，農工分業体制における農産物と手工業製品の交換である。
53) Chevalier [1963], p.66, p.69, p.294, Barrett [1970], pp.86-87.
54) Chevalier [1963], p.169, p.293, p.154, Berthe [1966], p.93.
55) Bauer [1986], p.160, Chevalier [1963],p.287, Chevalier [1959], p.5.
56) Bauer [1986], p.180, Florenscano [1984], p.169.
57) 季節労働が少からぬ意義をもつことは，狭い意味でのアシエンダに限らず，プランテーションについても同様である。(Wolf and Mintz [1957], p.401.)
58) Bauer [1986], p.162, Lockhart [1969], p.423.
59) Bauer [1986], p.164.
60) Macleod [1984], p.231, Barrett [1970], p.9, p.12, p.95.
61) Bauer [1986], p.167.
62) Florenscano [1984], pp.168-169, Bauer [1983], p.102, Chevalier [1963], p.282, p. 285.
63) Macleod [1984], p.230.
64) Florenscano [1984], p.179, Bauer [1986], p.163, Chevalier [1963], pp.282-283, Barrett [1970], pp.23-24.
65) Van Young [1983], pp.23-24, Mörner [1973], pp.199-200.
66) Bauer [1983], p.100.
67) Chevalier [1963], p.176, p.178, Van Young [1983], p.26.
68) Bauer [1986], p.158.
69) Florenscano [1984], p.175, p.177, Lockhart [1969], p.424, Chevalier [1963], pp. 81-82.
70) Florenscano [1984], p.183, Mörner [1973], p.198.
71) Van Young [1983], p.34, Macleod [1984], p.252.
72) Lockhart [1969], p.420, Chevalier [1959], p.7, Chevalier [1963], p.146.
73) Macleod [1984], p.252, Mörner [1984], p.211, Barrett [1970], pp.22-23.
74) Florenscano [1984], pp.179-180.
75) Lockhart [1969], p.429.
76) Barrett [1970], pp.35-37, p.73, Bauer [1986], p.158, p.160, p.169,

Berthe [1966], p.95.

77) Bauer [1986], p.162, p.160.

78) Chevalier [1963], p.166.

79) Chevalier [1963], pp.263-264.

80) Mörner [1973], p.192, Lockhart [1984], p.272, Chevalier [1963], p.55.

81) これまで本稿は慣習にしたがって，アシエンダやプランテーションなどの大規模な農業経営を大土地所有制と呼んできたが，本文で述べたことからわかるように，この語はこれらの農業経営の実態を的確に表現するものではない。領主制という語のほうがより適切ではないかと思われる。

参考文献

Bagchi, A. K. [1982], *The Political Economy of Underdevelopment*, (Cambridge: Cambridge University Press).

Barrett, W. [1970], *Sugar Hacienda of the Marqueses del Valle*, (Minneapolis: University of Minnesota Press).

Bauer, A.J. [1986],'Rural Spanish America: 1870-1930', in Bethell, L. [1986].

Bauer, A.J. [1983],'Jesuit Enterprise in Colonial Latin America: A Review Essay', *Agricutural History*, Vol.57, No.1, pp.90-104.

Bertrand, M. [1987],'Les Techniques Agraires dans la Region de Rabinal au XVIIIe Siècle', *Asclepio*, Vol.39, No.2, pp.145-159.

Berthe, J.-P. [1966],'Xochimancas: Les Travaux et les Jours dans une Hacienda Sucrière de Nouvelle-Espagne au XVIIe Siècle', *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, Vol.3, pp.88-117.

Bethell, L. [1984](ed.), *The Cambridge History of Latin America, Vol.2: Colonial Latin America*, (Cambridge: Cambridge University Press).

Bethell, L. [1986](ed.), *The Cambridge History of Latin America, Vol.4: c1870 to 1930*, (Cambridge: Cambridge University Press).

Bethell, L. [1994](ed.), *The Cambridge History of Latin America, Vol.6: 1930 to the Present*, (Cambridge: Cambridge University Press).

Chevalier, F. [1959], 'Survivances Seigneuriales et Présages de La Révolution Agraire dans le Nord du Mexique: Fin du XVIIIe et XIXe Siècle', *Revue Historique*, Vol.222, pp.1-18.

Chevalier, F. [1963], *Land and Society in Colonial Mexico: The Great Hacienda*, trans. by A. Eustis, (London: University of California Press),

Chevalier, F. [1966], 'Témoinages littéraires et Disparités de Croissance: L'expansion de la grande Propriété dans le Haut-Pérou au XXe Siècle', *Annales E.*

S.C.,Vol.21, No.4, pp.815-831.

de Janvry, A. [1981], *The Agrarian Question and Reformism in Latin America*, (Baltimore: The Johns Hopkins University Press).

Florescano, E. [1984],'The Formation and Economic Structure of the Hacienda in New Spain', trans. by R. Boulind, in Bethell, L. [1984].

Furtado, C. [1970], *Economic Development of Latin America: A Survey From Colonial Time to the Cuban Revolution*, trans. by S. Macedo, (Cambridge: Cambridge University Press).

Garavaglia, J.C., and J.C. Grosso [1989], Marchands, Hacendados et Paysans à Tepeaca: Un Marché Local Mexicain à la Fin du XVIIIe Siècle, Trans. by J.P. Zuniga. *Annales E.S.C.*,Vol.44, No.3, pp.553-580.

Kay, C. [1974],'Comparative Development of the European Manorial System and Latin American Hacienda System', *Journal of Peasant Studies*, Vol.2, pp.69-98.

Lockhart, J, [1969],'Encomienda and Hacienda: The Evolution of the Great Estate in the Spainish Indies', *Hispanic American Historical Review*, Vol.49, No.3, pp. 411-429.

Lockhart, J, [1984],'Social Organization and Social Change in Colonial Spanish America', in Bethell, L. [1984].

Long, N, and B. Roberts [1994],'The Agrarian Structures of Latin America: 1930-1990', in Bethell, L. [1994].

Macleod, M. J. [1984],'Aspects of the Internal Economy of Colonial Spanish America: Labour; Taxation; Distribution and Exchange, in Bethell, L. [1984].

Maddison, A. [1991], *Dynamic Forces in Capitalist Development: A Long-Run Comparative View*, (Oxford: Oxford University Press).

Mörner, M. [1973], 'The Spanish American Hacienda: A Survey of Recent Research and Debate', *Hispanic American Historical Review*, Vol. 53, No.1, pp.183-216.

Mörner, M., [1984], 'The Rural Economy and Society of Colonial Spanish South America', in Bethell, L [1984].

Super, J.C. [1976],'Querétaro Obrajes: Industry and Society in Provincial Mexico, 1600-1810', *Hispanic American Historical Review*, Vol.56, No.2, pp.197-216.

Suremain, Ch. E. de [1992],'Les Système de Plantation d'un Système d'Hacienda: Étude sur la Diversitè des Cultures et des Mains-d'œuvre dans Trois Grandes Exploitations Agricoles de la Côte Équatorienne', *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines*, Vol.21, No.1, pp.349-374.

宇佐見耕一 [1987],「アシエンダ研究の系譜」,『ラテンアメリカ・レポート』, Vol.4, No.

3, pp.9-15.

Van Young, E. [1983],'Mexican Rural History since Chevalier: The Historiography of the Colonial Hacienda', *Latin American Research Review*, Vol.18, No.3, pp. 5-61.

Wolf, E.R. and S.W. Mintz [1957],'Haciendas and Plantations in Middle America and the Antilles', *Social and Economic Studies*, Vol.6, pp.380-412.